

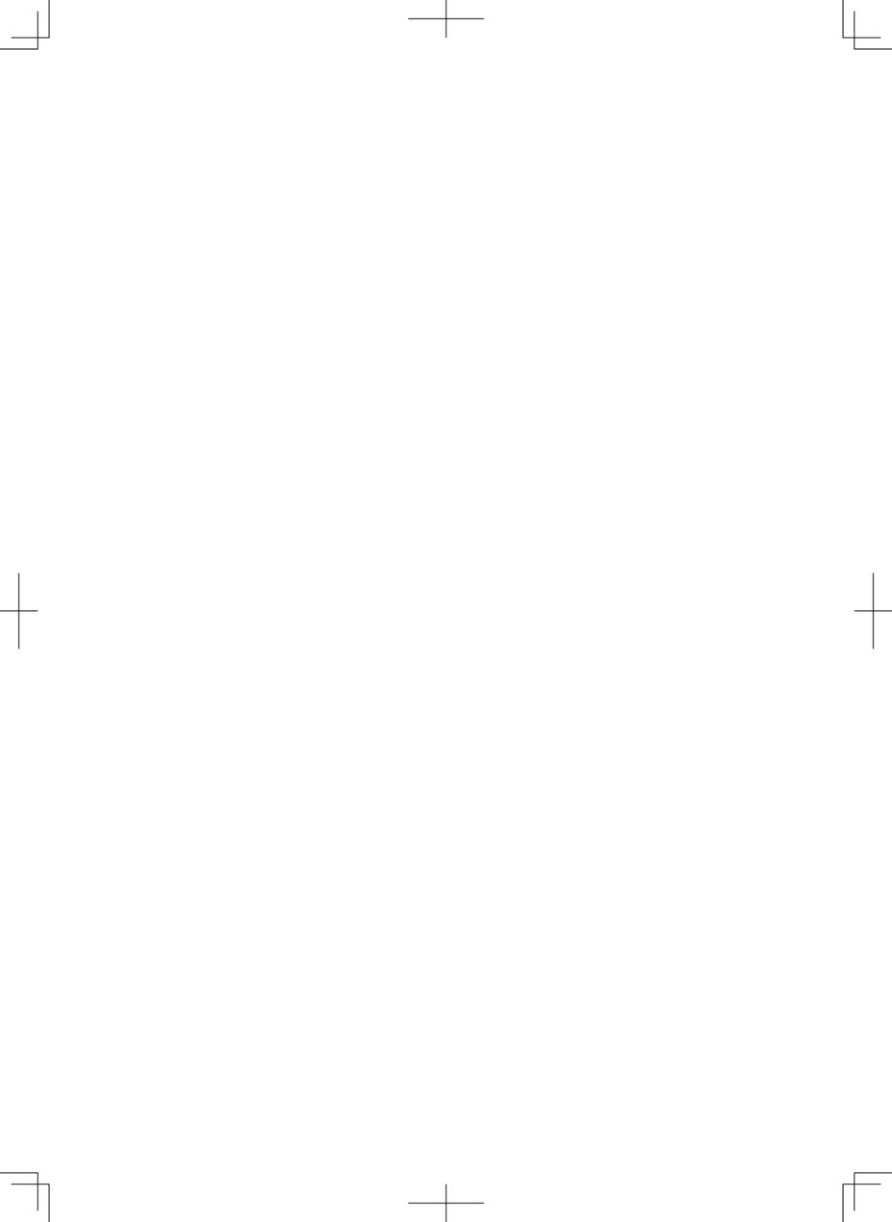
大友府内24

中世大友府内町跡第113次調査

—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016

大分市教育委員会



序 文

本書は、大分市教育委員会が集合住宅建設工事に伴い実施しました中世大友府内町跡第113次発掘調査の報告書です。

中世大友府内町跡は、大分川河口左岸に位置しており、鎌倉時代から戦国時代に豊後国を治めた大友氏の拠点となった都市遺跡です。特に、21代義鎮（宗麟）の時代には、南蛮貿易の推進により海外から様々な文化やものが伝わり、発掘調査の成果もこうした歴史事象を裏づけています。

今回の調査地点は、戦国時代のまちの様子を描いた「府内古図」にある「下町」と、江戸時代の府内城下町に新しく造られた「東新町」にあたり、二つの時代のまちが重複する地点に位置します。

調査の結果、近世では町屋に配された区画溝や井戸跡・土坑、中世では土師器や生活雑器などを廃棄したと考えられる土坑などを確認し、戦国時代から江戸時代に変化していくまちの様子が明らかになりました。

本書に収録されたこれらの資料が学術研究のみならず、広く市民の皆様にふれることができ、郷土の歴史学習に幅広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に至るまで、ご理解とご協力を賜りました株式会社エフケイブランならびに関係者各位に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月 18 日

大分市教育委員会

教育長 三浦 享二

例 言

- 1 本書は、大分市教育委員会が大分市金池町4丁目において、集合住宅建設に伴い平成27年度に調査を実施した中世大友府内町跡第1133次調査の発掘調査報告である。
- 2 調査は、株式会社エフケイプラン代表取締役 古庄恭二からの依頼を受け、大分市教育委員会が実施している。
- 3 発掘調査における遺跡の掘削履歴及び調査記録作成業務及び遺物の整理は、大分市教育委員会文化財課（調査担当：小野綾夏）の委託を受け、株式会社九州文化財総合研究所（業務責任者：杉原宗久）が行った。
- 4 遺物の実測・写真撮影は、株式会社九州文化財総合研究所（業務責任者：杉原宗久）が大分市教育委員会文化財課の委託を受けて行った。
- 5 本書に掲載した出土遺物の実測・製図、遺構配置図・全体遺構図・個別遺構図の製図、遺物写真撮影は、株式会社九州文化財総合研究所（業務責任者：井上素裕）が大分市教育委員会文化財課の委託を受けて行った。
総括図版の作成・製図作業は小野綾夏（大分市教育委員会文化財課職員）が行った。
- 6 本書の執事は、以下のとおりである。
第Ⅰ章 池邊千太郎（大分市教育委員会文化財課）
第Ⅱ・Ⅲ章 株式会社九州文化財総合研究所（業務責任者：井上素裕）
第Ⅳ章 小野綾夏（大分市教育委員会文化財課）
- 7 本書の編集は、大分市教育委員会と株式会社九州文化財総合研究所（業務責任者：井上素裕）の双方の企画の下、株式会社九州文化財総合研究所（業務責任者：井上素裕）が行った。
- 8 出土遺物・記録資料は、大分市埋蔵文化財保存活用センター（大分市大字原田337番地の5）に収蔵・保管している。
- 9 報告書の作成業務については、『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書作成指針』に基づき実施している。
- 10 発掘調査に際して、以下の方々に御指導・御助言を頂いた。
小野 正敏（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構元理事）、伊藤 正義（鶴見大学文学部教授）、金原 正明（奈良教育大学理科教育講座 古文化財科学 教授）

凡 例

- 1 本書で用いた遺跡略号と遺構掲載順番は、以下のとおりである。
① SK：土坑、② SD：溝状遺構、③ SE：井戸跡、④ SP：ピット・小穴、⑤ SX：その他
- 2 本書に用いた方位はすべて座標北（G.N.）である。座標北は、日本測地系の平面直角座標2系を基点として表記している。
- 3 本書に掲載した遺構配置図（遺構の新旧関係を記録した図面）の表記は、新旧関係を実線で示し、下位の遺構については点線で記している。また、表記上、遺構の新旧関係が不明瞭な場合は、矢印で補足している。
- 4 遺構の規模と深度の単位はメートル（m）で、遺物の法量はセンチメートル（cm）で表記している。
- 5 本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。
(1) 遺物断面が黒塗りのもの……須恵瓦土器・陶器
(2) 遺物断面が灰色のもの……瓦質土器・瓦類
(3) 遺物平面の線と調整の変換点……実線
(4) 調整が同じでその単位が分かるもの……長破線
(5) 輪と付着物、黒斑等その範囲を示す必要があるもの……一点破線
- 6 本書に用いた出土土器の分類は以下の文献による。また、年代観は下図に示す標準資料との比較による。
長 直信 2012「大友氏館跡出土土器の編年学的検討」『大分市内遺跡確認調査概報・2010・2011年度』大分市教育委員会
太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊XV—陶磁器分類編—』
小野正敏 1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
栗岡 実 2005「備前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年 資料集』
大分市教育委員会 2015「第三章 第2節 大友氏館跡出土の遺物分類と時期区分について」『大友氏館跡1』

【A系統】

（「中世在地土器」）



【B系統】

（「土器を利用した調整を施す器」(F₁) 字に属するもの）



【C系統】

（「京系土器」）



目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査経過	1
第2節 調査組織	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の成果	4
第1節 調査の概要	4
第2節 基本層序	4
第3節 主要遺構	7
第4節 出土遺物	11
第Ⅳ章 総括	15
第1節 調査地点の時期別の様相	15
第2節 まとめ	15

図版目次

第1図 調査地点位置図	2
第2図 調査区周辺の地形と遺跡分布図	3
第3図 基本層序	4
第4図 第113次調査区遺構配置図(1/200)	5
第5図 第113次調査区全体遺構図(1/200)	5
第6図 第113次調査区土層図(1/60)	6
第7図 SK005・SK035 遺構実測図(1/40・1/60)	7
第8図 SK085・SK110 遺構実測図(1/40・1/80)	8
第9図 SD025・SD030 遺構実測図(1/60・1/40)	9
第10図 SE029 遺構実測図(1/40)	10
第11図 出土遺物実測図①(1/4)	13
第12図 出土遺物実測図②(1/4)	14
第13図 町113次調査区周辺の町割り (上：中世 下：近世)(1/2500)	16

表目次

第1表 遺構出土遺物一覧表①	17
第2表 遺構出土遺物一覧表②	18
第3表 遺構出土遺物一覧表③	19
第4表 出土遺物観察表①	20
第5表 出土遺物観察表②	21
第6表 出土遺物観察表③	22

写真図版目次

写真図版 1

調査区東側（西より）

調査区西側（東より）

写真図版 2

SK005 検出状況（東より）

SK035 土層断面（東より）

SK035 完掘状況（東より）

SK085 土層断面（南より）

SK085 完掘状況（南より）

SK110 完掘状況（北より）

SD030 完掘状況（北より）

SE029 井筒検出状況（西より）

写真図版 3

第 11 図 -1 / 第 11 図 -4 / 第 11 図 -6

第 11 図 -22 / 第 11 図 -23 / 第 11 図 -24

第 11 図 -25 / 第 11 図 -28 / 第 11 図 -29

第 11 図 -34 / 第 11 図 -45 / 第 11 図 -51

第 12 図 -22 / 第 12 図 -23 / 第 12 図 -28

第 12 図 -30 / 第 12 図 -41 / 第 12 図 -42

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査経過

平成 27 年 4 月に、大分市金池町 4 丁目において、集合住宅建設が計画され、開発事業者から文化財課に周知の埋蔵文化財包蔵地の照会がなされた。開発予定地は、中世大友府内町跡と近世の府内城下町跡が重複する場所に位置することから、事業者と文化財課とで事業計画についての協議を進めた。その後、事業者から埋蔵文化財調査費用の積算について平成 27 年 5 月 1 日付けで依頼を受けた。

このため文化財課では、遺跡の深さや遺構密度などを把握する目的で確認調査を計画し、開発予定地が当時駐車場として使用されていたために使用者の承諾を得て、平成 27 年 5 月 26 日に実施した。その結果、中世及び近世の遺構・遺物が確認され、その情報を基に遺跡に影響を及ぼす範囲の発掘調査に要する費用積算を行い、6 月 1 日付けで確認調査結果と合せて、事業者に提示した。

これを受け、事業者と大分市教育委員会は、事業計画について協議し、発掘調査の実施等について、平成 27 年 6 月 18 日付けで、埋蔵文化財発掘調査業務等協定を締結し、この協定書に基づき、大分市金池町 4 丁目における埋蔵文化財の発掘調査委託契約を開発事業者である、株式会社エフケイブラン代表取締役 古庄恭二と締結した。

発掘調査は、開発事業者からの資金協力を得て平成 27 年 9 月 18 日に完了することを条件に行うこととし、8 月 5 日に着手し、8 月末に東側調査区が終了した後に調査区を反転し、西側調査区の調査を実施した。調査中の 8 月後半から 9 月の上旬にかけては、台風の影響や雨の影響を受けて調査の進捗に支障をきたす場面も生じたが、9 月 18 日に調査を無事に完了した。調査面積は 234.2 m²である。なお、遺跡の記録資料や出土遺物等の整理作業は調査の終了後に引き続き行い、報告書の作成を平成 28 年 3 月 18 日まで行った。

第 2 節 調査組織

調査主体者 大分市教育委員会 教育長 三浦 享二

調査体制 (平成 27 年度)

文化財課			埋蔵文化財担当班		
文化財課長	塔鼻	光司	班長 (ゲル・ブリーダー)	池邊千太郎	
参事	長野	清尊	事務員	小野	綾夏 (調査担当)
	坪根	伸也	嘱託職員	佐藤	里恵 (調査・整理担当)
特別顧問	玉永	光洋	管理庶務担当班		
歴史資料館館長	武富	雅宣	班長 (ゲル・ブリーダー)	首藤	敏行
副館長	安東	俊昭	主査	竹中	智美
顧問	讃岐	和夫	主任	朝川	貴俊
			文化財保護担当班		
			専門員	塩地	潤一

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

大分市は九州の北東部に位置し、北側は瀬戸内海西端にあたる別府湾に面している。別府湾に面した一帯には大分平野が広がっており、由布山系を源流とする大分川が平野を東流し、東西に延びる標高約30～40mの上野台地を境に北流へと転じて別府湾に注いでいる。

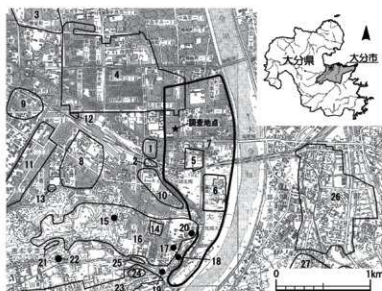
大分川はその流域に河岸段丘を発達させ、上野台地など低位の河岸段丘を形成している。さらに河口部付近には三角州が展開しており、自然堤防などの微高地と後背湿地が広がっている。今回報告する中世大友府内町跡第113次調査区は、この大分川河口部西岸に形成された標高4～6m前後の沖積地に位置している。

第2節 歴史的環境

調査区は、中世大友府内町跡の北西端、近世の府内城・城下町跡では南東側に位置しており、中世と近世の遺跡が重なる部分である。

中世府内町の様子を描いた「府内古図」にある「下町」と、近世の府内城下町では「東新町」にあたり、「府内古図」に記された南北道路(第4南北街道)と堀九井口から日向への近世日向道推定地の西側隣接地に位置する。後世まで残る地割等から、この通りに面して東西に長く南北に短い町屋が連なっていたと考えられている。これまでの中世大友府内町跡の発掘調査において都市の建設が開始されたと考えられるのが14世紀であり、その後、第21代義親(宗麟)・第22代義統の治世下の16世紀後半に最も発展する。「府内古図」には「下町」西側の道路に面する町屋のさらに奥側(裏手)に「大雄院」と「大智寺」の名前が見える。

「大雄院」と「大智寺」はともに臨済宗南禅寺派の寺院と言われる^(注1)。大雄院は第17代大友義右(1469-1496)が創建したとも、第19代大友義長(-1518(1513年))によって建てられたとも言われるが、いずれにしても16



- | | | |
|-------------------|------------|-------------|
| 1 金池南道跡 | 10 若宮八幡宮道跡 | 19 岩屋寺石仏 |
| 2 上野町道跡 | 11 大道条里跡 | 20 大臣塚古墳 |
| 3 勢家道跡 | 12 末広道跡 | 21 南太平寺横穴墓群 |
| 4 府内城・城下町 | 13 東大道道跡 | 22 御藍石仏 |
| 5 大友館跡 | 14 上野大友館跡 | 23 古国府道跡群 |
| 6 蔭山万寿寺跡 | 15 飯盛塚古墳 | 24 岩屋寺道跡 |
| 7 中世大友府内町跡 | 16 上野道跡群 | 25 岩屋寺横穴墓群 |
| 8 大道道跡群 | 17 上野竜王堀道跡 | 26 下郡道跡群 |
| 9 東田室道跡 | 18 大分元町石仏 | 27 羽田道跡 |

1. 周辺遺跡分布図 (1/40,000)



2. 中世大友府内町跡調査地点位置図 (1/10,000)

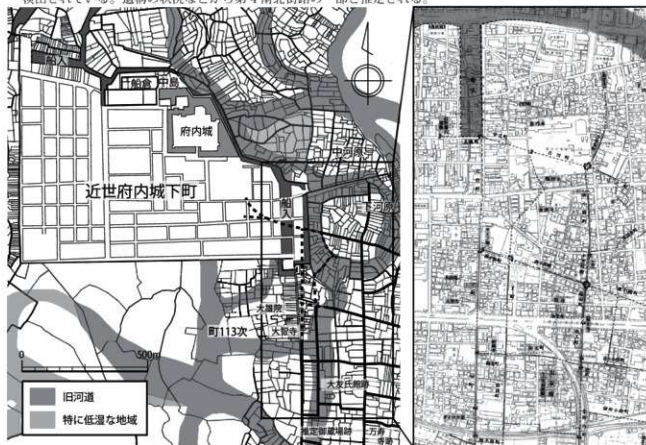
第1図 調査地点位置図

世紀初頭前後に建立された寺院と考えられる。「府内古図」に記載される以外に顕著な記録資料はなく、廃絶時期も不明である。大智寺は第 11 代大友親善が嘉慶元(1387)年に府内に建てた「大慧寺」が元で、海部郡丹生に移され、その後第 17 代大友義行が改修し名前を「大智寺」に改名したとされるという説や、当初から「大智寺」であったとも考えられ諸説がある⁽¹²²⁾。戦国時代末には「府内古図」に描かれ、その後、天正 14(1586)年の島津進攻の兵火をまぬがれ現在まで位置を変えずに継続してきた施設として「府内古図」の信憑性を確かめる上でも戦国時代の府内の復元の上でも貴重な施設である。

近世の府内城下町は大友氏除国後の領主たちによって築城されていったが、その中でも、慶長 6(1601)年に入封した竹中重利が城の修復と増築工事、城下の建設を行い、翌年には天守等城郭中心部を完成させた。また、府内城下町においては、長方形街区に短冊形地割りに区画された町屋を配置し、ここに中世大友府内町に所在した町屋や寺院を町名ごと移転させ、新たな町組に編入している⁽¹²³⁾。

今回調査を実施した中世大友府内町跡第 113 次調査区周辺では、平成 18 年度に第 74 次調査⁽¹²⁴⁾が、平成 26 年に第 108 次調査⁽¹²⁵⁾が行われている。

第 74 次調査区は本調査区の北西約 120m に所在し、「大智寺」や「大雄院」などの北側に位置する。調査の結果、戦国時代の東西溝や近世初頭の井戸跡が検出され、中世大友府内町の北西隅の戦国末期～近世初頭土地利用が確認できた。第 108 次調査区は、長浜(塩九升)通りを挟んで本調査区の東側に位置する。調査の結果、近世においては 18 世紀前半から 19 世紀中頃の遺構群が重複して検出された。「東新町」の焼継ぎ文字がある肥前染付皿が出土していることから、近世における「東新町」である可能性が示唆された。また、調査区西側端部では道路側溝とみられる溝状遺構や路盤と推定される遺構が南北に展開する形で検出されており府内城下町の塩九升口へつながる日向道の一部と推定される。中世においても近世の道路跡の下層から古い道路跡が南北に展開する形で検出されている。遺構の状況などから第 4 南北街路の一部と推定される。



1. 地形図及び明治時代の地籍図(1/5,000)

2. 戦国時代の府内町復元図(部分)(1/10,000)

* 本図は、明治初期に作成された字(町)図をもとに、古地図や字名、地割跡などから施設や道路の位置・範囲を、地籍図(左図)、現在の地図(右図)に復元しているが、発掘調査によって施設の範囲の定まらぬ(大友親善・御成堀跡・万寿寺跡等)や施設に、他に他の施設が重なる(寺域の一部に町が建設される等)ことなどがわかってきた。地割跡はその最終段階を残しており、本来の施設跡の範囲を示していない。

第 2 図 調査区周辺の地形と道路分布図

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の概要

調査地は大分市金池町4丁目に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地である中世大友府内町跡の北西部にあたる。今回の調査は、集合住宅建設に伴い中世大友府内町跡第113次調査として、平成27年8月5日から同年9月18日の期間に実施したものである。調査範囲は、事前の確認調査の結果を踏まえて、建設予定地のうち建物の基礎の影響を受ける部分とし、調査は、標高約3.80m地点の明黄褐色粘質土から検出される遺構を対象とした。調査面積は234.2㎡である。

調査の結果、近世の遺構では主に18世紀から19世紀の井戸跡や土坑、区画溝と想定される溝状遺構が検出された。中世は土師器ⅡBを主体とする土坑や、備前掻鉢片や瓦質土器片などの生活雑器類の破片が含まれる土坑など、16世紀中頃から後半以降にかけての遺構が検出された。

第2節 基本層序

第3図は、調査区南側及び西側を基本作成した土層模式図である。本調査区の地盤標高は約4.80mで、表土下には、明茶褐色土(1)、明灰褐色砂質土(2)、明黄褐色粘質土(3)の順で土層が認められる。

(1) 明茶褐色土

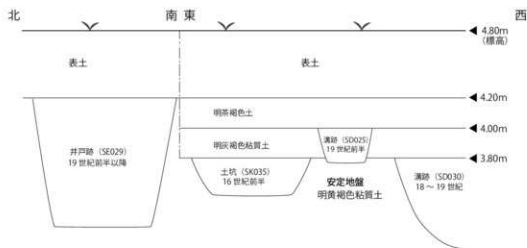
堆積厚は約0.2mで、上層(標高：4.3m)からは、井戸跡(SE029)が検出され、19世紀前半以降である。

(2) 明灰褐色粘質土

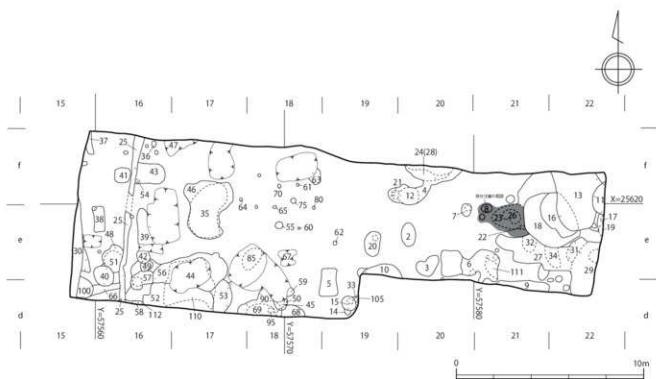
堆積厚は約0.4mで、上層(標高：4.1m)からは、溝状遺構(SD025)が検出され、19世紀前半である。

(3) 明黄褐色粘質土(安定地盤)

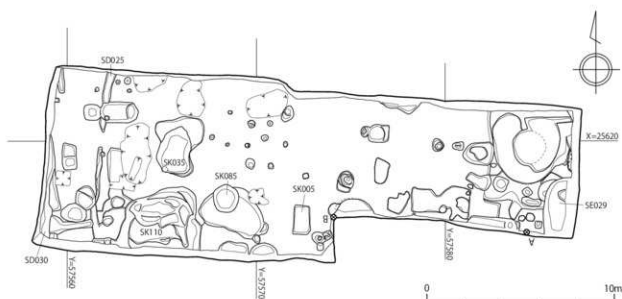
堆積厚は0.4m以上で、硬く締まりが強い安定した地盤である。この層では遺物の出土はなく、隣接する調査で検出している自然堤防を構成する地層と考えられる。上層(標高：3.8m)からは、18世紀から19世紀の溝状遺構(SD030)や16世紀の土坑などの遺構群が確認された。今回の調査では、この層で検出した遺構群を対象とした。



第3図 基本層序

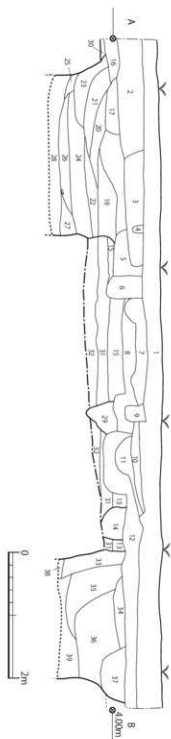


第4図 第113次調査区遺構配置図 (1/200)



第5図 第113次調査区全体遺構図 (1/200)

第三章



第6図 第113次調査区土層図(1/60)

第3節 主要遺構

土坑

SK005(第7図)

調査区中央南側の d18 ~ 19・e19 グリッドで検出した土坑である。平面形状は方形を呈しており、長軸 1.56m、短軸 0.94m で最大深度は 0.40m である。埋土は暗灰褐色粘質土単層で遺構からは、土師器環 B や龍泉窯系青磁碗(大宰府検Ⅱ類)、染付筒型碗等多様な遺物が出土していることから廃棄土坑と考えられる。遺構の時期は出土遺物から 19 世紀前半と考えられる。

SK035(第7図)

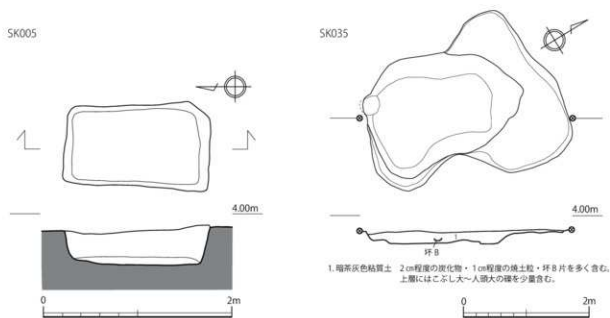
調査区西側の e・f17 グリッドで検出された土坑である。検出時は遺構プランがはっきりせず溜まり状になっていたため S046 として掘下げを行った結果、検出面から約 0.04m 掘下げた時点でプランを検出した。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 2.52m、短軸 1.62m、最大深度は 0.21m を測る。埋土は暗茶灰色粘質土の単層で炭化物や焼土粒を多く含むことから人為的に埋め戻されたと考えられる。遺構からは、土師器環 B、皿 C、坏 a(白色系)、瓦器碗等が出土しているが、中でも土師器環 B は完形品 1 点を含めて破片が大量に出土している。遺物の出土状況から廃棄土坑と考えられる。遺構の時期は出土遺物から 16 世紀中頃以降と考えられる。

SK085(第8図)

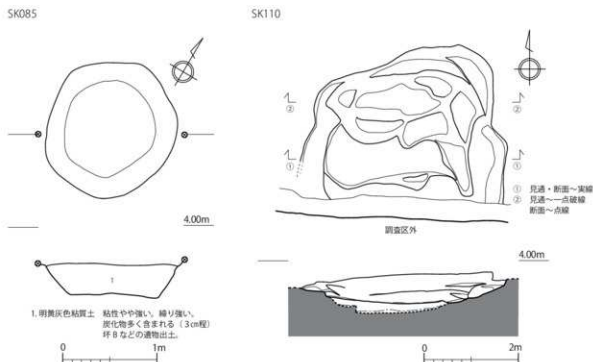
調査区西側の e17 ~ 18 グリッドで確認された土坑で、カクランを 0.05m 掘下げた時点で検出された。平面形状は円形を呈しており、長軸 1.48m、短軸 1.32m、最大深度 0.39m を測る。埋土は明黄灰色粘質土の単層で炭化物を多く含むことから、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺構からは、土師器環 B、備前揃鉢、白磁碗(大宰府検Ⅳ類)等が出土しており、遺物の出土状況から廃棄土坑と考えられる。遺構の時期は出土遺物から 16 世紀と考えられる。

SK110(第8図)

調査区南西側の d16 ~ 17・e16 ~ 17 グリッドで検出された土坑であり、遺構の南側は調査区外へ展開している。周辺遺構との重複関係は、SK110 がカクラン(S044)と SK052 に切られている。平面形状は遺構南側の状



第7図 SK005・SK035 遺構実測図(1/40・1/60)



第8図 SK085・SK110 遺構実測図(1/40・1/80)

況が不明であるが、東西4.30+αm、南北3.14+αm、最大深度0.63mを測り不整形な楕円形を呈するものと考えられる。埋土は暗茶色砂質土である。遺構からは、土師器小皿B、皿C、雁振瓦、唐津染付片等が出土している。遺構の時期は出土遺物から18世紀前半頃と考えられる。

溝状遺構

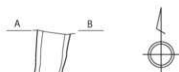
SD025(第9図)

調査区西側のd・e・f16グリッドで検出された南北に走る溝状遺構である。遺構はほぼ直線状であり、主軸方向N-6°-Eで、遺構の北端は調査区外に延びている。遺構は、長さ6.80+αm、幅0.16m～0.70m、深度は0.02m～0.40mを測り、検出面が下がったことから、深度の浅い部分であった中央部分が途切れる状態になったと考えられる。土層の確認から最大幅約0.70m、最大深度約0.40mを測り、断面形状は逆台形状である。埋土は黄色ブロックを含む暗灰茶色粘質土の単層で締まりが強く粘性がある。遺構からは土師器杯B、皿C、国産陶器唐津掻鉢、陶胎染付碗片等が出土している。遺物から遺構の時期は19世紀前半頃と考えられる。

SD030(第9図)

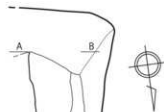
調査区西端のd・e・f15グリッドで検出された南北方向に走ると考えられる溝状遺構である。周辺遺構との重複関係は、SD030がSK100を切っている。主軸方向N-3°-Eを示し、土層観察により遺構東側の立ち上がり部分が確認されたが、遺構の西半分は調査区西側へ展開している。溝の規模は、大部分が調査区外へ展開しているため不明であるが、検出された部分で長さ5.90+αm、最大幅0.52m、最大深度0.32mを測る。断面形状も不明である。埋土は土層観察から3層に分類され、土層の状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺構からは、土師器杯A、杯B、皿C、土師質土器火鉢・甕、国産陶器備前碗、瓦類、京焼風陶器碗等が出土している。遺構の時期は、出土遺物から18～19世紀と考えられる。

SD025

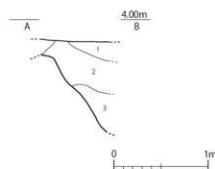


1. 暗灰茶色粘質土 黄色ブロック(5cm)を含む。締まりは強く、粘性がある。近世の溝である。

SD030



調査区外



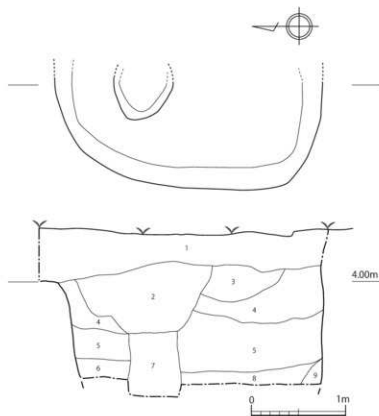
1. 暗灰茶色粘質土 粘性は強く、締りも強い。5cm程度の黄色ブロックを含む。
2. 暗灰茶色粘質土 粘性は強く、締りも強い。こぶし大の礫を一部分に含む。遺物を含む。
3. 明灰色粘質土 粘性が非常に強く、締まりが強い。

第9図 SD025・SD030 遺構実測図(1/60・1/40)

井戸跡

SE029(第10図)

調査区東側の d・e22 グリッドで検出した井戸跡であり、遺構の東半分は調査区外に展開している。周辺遺構との重複関係は、SE029 が SK031 を切っている。遺構検出面での平面形状は円形を呈するものと想定され、直径は 3.20m 前後を測り、中央部分北側で直径 0.60m の円形プランが確認できた。安全面を考慮して約 0.90m 掘下げた時点で掘削を中止した。掘削した範囲では井筒は残存しておらず、痕跡のみであった。掘削可能範囲の最下層である第 6 層の茶褐色砂質土・第 8 層の明茶褐色粘質土は、砂質や粘質であるが湧水は見られなかった。また黄色ブロック土を多く含むことから人為的に埋め戻されたと考えられる。遺構からは、土師器環 A・小皿、土師質土器大甕、瓦質土器火鉢、龍泉窯系青磁碗、国産陶器刷毛目唐津灰入・上野高取瓶、京信楽焼碗、染付筒型碗等多くの遺物が出土している。遺構の時期については、井戸掘削時の裏込め土と考えられる第 6 層から土師器環 A・小皿、国産陶器常滑甕が、井戸廃絶時の埋土と考えられる第 7 層から土師器環 A、白色系土師器、白磁、染付(近世)が出土していることから、最終的な廃絶時期は 19 世紀前半であると考えられる。



1. 暗茶灰色土 バラスが散かれ、その下位には、近現代瓦片やレンガが入る。
2. 明茶褐色粘質土 炭化物を中量、1cm程度の黄色粒を全体に含む。18c 中頃に降の遺物を含む。
締りやや強く、粘性やや強い。
3. 明茶褐色粘質土 明茶粘質土ブロックを多量、黄色ブロック・黄色砂を少量含む。締まりは
やや強く、粘性やや強い。
4. 暗茶褐色粘質土 明茶褐色土ブロックを全体的に多量に含む。締まりはやや強く、粘性あり。
5. 明茶褐色粘質土 明茶褐色土ブロックと明茶褐色土ブロックを大量に含む。4層より砂を含む。
6. 茶褐色砂質土 明茶褐色土ブロックを中量含む。全体間に砂が混ざるため、締まりはやや強い。
7. 暗茶褐色粘質土 粘性が非常に強く、1cm程度の黄色粒を多量に含む。在地系土師器片を少量含む。
井戸跡は見られない。
8. 明茶褐色粘質土 明茶褐色シルト質土ブロックを多量に含む。粘性が非常に強く、締まりはやや強い。
9. 明茶褐色砂 地山の位より検出できる砂層。

第10図 SE029 遺構実測図 (1/40)

第4節 出土遺物

今回の調査では、コンテナ 14 箱の遺物が出土した。出土遺物は弥生時代から 19 世紀に至るまで幅広い時代にわたっているが、主体となるのは 16 世紀中頃～後半、18 世紀～19 世紀にかけての遺物である。主要遺構の時期を示すものや特殊な遺物を中心に掲載、報告を行う。また、本文中に記載がなかった遺構及び出土遺物については遺構出土遺物一覧表(表 1～3)を、遺物の種類・名称・法量については出土遺物観察表(表 4～6)に示している。

SK005 出土遺物(第 11 図)

1 は染付皿の底部片であるが、周囲を加工しメンコとして転用されたと考えられる。2 は龍泉窯系青磁碗(大宰府検 II 類)で、外面に蓮弁が残る。3 は陶器の小杯であり、猪口と考えられる。4 は椀瓦で外面に刻印が認められる。5 は土鉢で、6 は土製のメンコである。

SK010 出土遺物(第 11 図)

7～9 は土師器杯 B で、底部に回転系切痕を有する。10 は瓦質土器鍋で、口縁部が若干「く」の字を呈す。摩滅が激しいため調整は不明である。11 は常滑焼の猿の胴部と考えられる。

SK024 出土遺物(第 11 図)

20 は瓦質土器火鉢である。口縁部は玉縁状に仕上げ、内外面ともに回転ナデとミガキがみられる。

SK035 出土遺物(第 11 図)

22～30 は土師器 B 系統のものである。22・23 の極小皿 B、24・25 の小皿 B と小型の皿は 2 法量あり、26～30 は杯 B に分類される。31 は土師器小皿 C で、内外面ともに回転ナデがみられる。32 は土師器皿 C の口縁部分であり、薄く丁寧なつくりである。33 は中国産の青磁碗である。34 は同安窯系青磁碗(太宰府検 I-1b 類)で外面に片形文、内面に柳葉文がみられる。

SK045 出土遺物(第 11 図)

35 は土師器杯 A の底部である。36 は土師器杯 B である。37・38・39 は土師器皿 C である。39 は復元口径が 15.0cm とかなり大きいものである。

SK046 出土遺物(第 11 図)

40 は土師器杯 B である。41・42 は薄手の土師器皿 C である。43 は砥石である。中央部分がやや窪んでおり、使用痕が認められる。

SK053 出土遺物(第 11 図)

44 は瓦質土器火鉢である。45 は瓦質土器鉢と考えられ、外面に花形のスタンプが刻印されている。46 は龍泉窯系青磁碗で、精緻なつくりである。高台部分がかなり肥厚している。

SK056 出土遺物(第 11 図)

47 は白磁皿の口縁部分である。48 は白磁の碗で、外面が一部露胎している。49 は青磁瓶と思われ、色調は淡緑灰色である。50 は土鉢である。

SK068 出土遺物 (第 11 図)

51 は右白の上部であり、下面が摩耗している。

SK085 出土遺物 (第 11 図)

52・53 は土師器小皿 B であり、52 の底部には板状圧痕がみられる。54-57 は土師器環 B である。58 は瓦質土器播鉢 (A1 類) である。59 は白磁碗 (大宰府税Ⅳ類) で、玉縁口縁である。60 は白磁碗で、色調は淡緑灰色を示す。61・62 は備前播鉢 (中世 5 期) で、63 は国産陶器常滑産の大甕と考えられる。外面に焼成時のものと思われる付着物がみられる。

SK090 出土遺物 (第 12 図)

1 は土師器環 A である。2 は土師器小皿 B で、3 は白色土師器の底部と思われる。4～12 は土師器皿 C で、全て外面に強いヨコナデがみられる。13 は土鍾である。

SK110 出土遺物 (第 12 図)

16 は土師器極小皿 B である。17 は土師器環 B で、底部に糸切痕がみられる。18～20 は土師器皿 C である。18 は薄く、19 は厚いつくりである。21 は須恵質土器の片口鉢である。22 は断板瓦で、内外面に煤が付着している。

SD025 出土遺物 (第 12 図)

23 は国産陶器唐津産播鉢である。色調は暗褐色を呈し精緻な作りである。

SD030 出土遺物 (第 12 図)

24 は土師器環 A で、色調は橙茶色である。25 は京焼風陶器の碗で外面に二次被熱の痕跡がある。26 は国産陶器の土瓶の胴部と考えられる。

SE029 出土遺物 (第 12 図)

28 は土師器環 A で、口縁部分がほぼ直線的に立ち上がる。30 は国産磁器の皿である。内面に蛇の目軸刺ぎが認められる。31 は国産陶器唐津産筒型碗である。32 は国産陶器常滑産甕の胴部と考えられる。33 は国産陶器唐津産甕である。外面に刷毛目の文様があり、精緻な作りである。

SP015 出土遺物 (第 12 図)

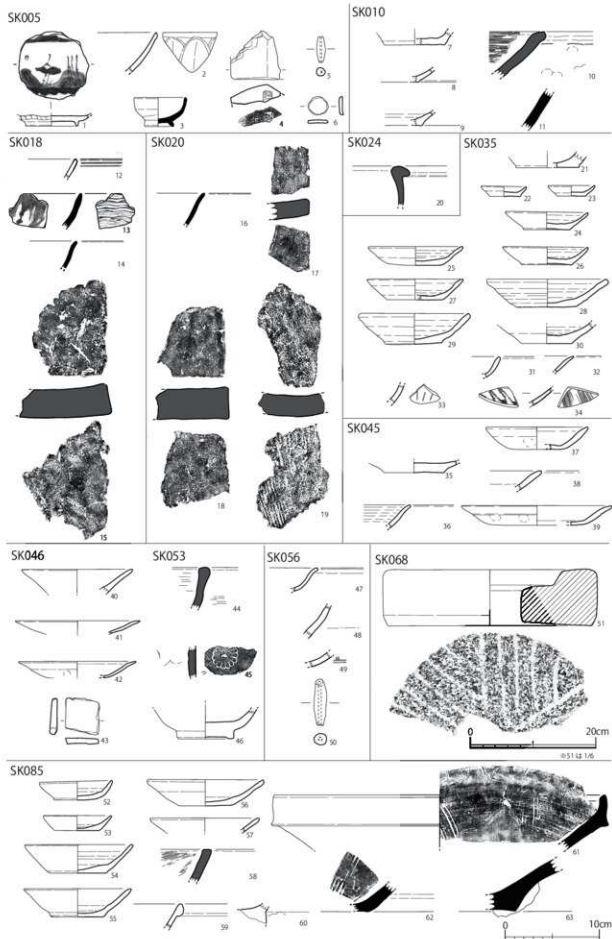
34 は国産陶器志野焼と考えられる向付である。

SP080 出土遺物 (第 12 図)

36 は土師器環 B である。内外面に回転ナデが、底部には糸切痕がみられる。

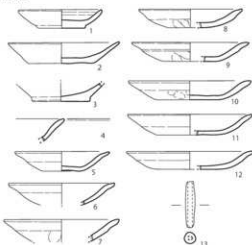
SX044 出土遺物 (第 12 図)

37・38 は瓦質土器火鉢である。39 は龍泉窯系青磁香がと考えられる。40・41 は国産磁器肥前系の碗で 40 は外面に「大阪新町お世紅」の文字があり、紅皿と考えられる。42 は国産磁器肥前系の皿で、高台内側に朱色で記名がある。43 は国産陶器備前産播鉢 (近世 1 期) である。

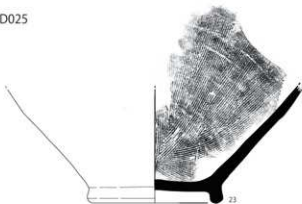


第11図 出土遺物実測図① (1/4)

SK090



SD025



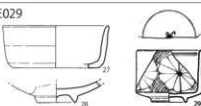
SD030



SK100



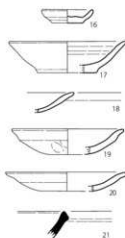
SE029



SE029 6 層



SK110



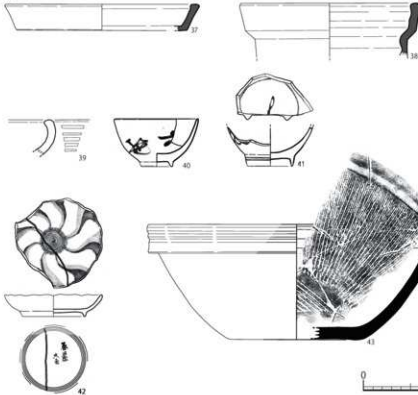
SP015



SP080



SX044



0 10cm

第 12 図 出土遺物実測図② (1/4)

第IV章 総括

第1節 調査地点の時期別の様相

調査地点の東側には現在長浜（堀九升）通りが南北に走っている。この道は、中世には第4南北街路、近世には日向道推定地に相当し、中世から現在まで続く市街地の主要幹線道路として機能しており、この道の沿線にはまちが形成されていた。地籍図には、近世の推定日向道に沿って形成された東新町の地割が現在でも明瞭に残り、東西方向に奥行きが長く南北方向の幅の狭い地割がみられる。今回の調査は対象敷地の面積が非常に狭く廃土処理の関係から、面積234.2㎡の調査区を東側と西側で反転し実施した。

調査の結果、標高約3.8m地点で安定地盤（明黄褐色粘質土）が検出でき、その上面で大きく16世紀代と18～19世紀の二時期に比定される遺構を確認した。中世に関しては、16世紀前半以前の遺構はなく、16世紀前半～中頃の環Bを主体とする土坑（SK035）や、16世紀後半の京都系土師器や生活雑器類などが出土する土坑（SK085）が見つかった。中世の遺構は調査区西側に位置し、東側は皆無であった。これらの土坑は、第4南北街路を基準とした奥行き20～30mの推定町屋域の範囲^{〔134〕}よりさらに西側に集中しており、周辺の調査で確認した町屋の空間利用とは異なっていた。近世の遺構状況としては、主に18～19世紀の井戸跡や土坑、区画溝と想定される溝状遺構が検出できた。その中でも、溝状遺構（SD030）は、調査地点東側を通る推定日向道（108SF100）^{〔135〕}より約50m西側の地点に位置し、東新町の西側を区画した背割溝であることが考えられる。井戸跡や土坑は調査区の中でも東側に集中しており、西側の背割溝に向かって希薄になる様子が見られた。なお、弥生時代～中世前半期の遺物は出土しているものの遺構は確認されない。

第2節 まとめ

1. 中世のまち「下町」

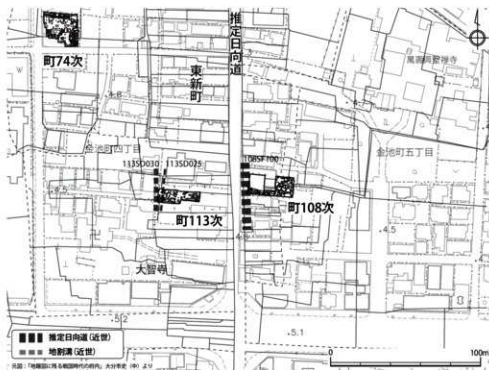
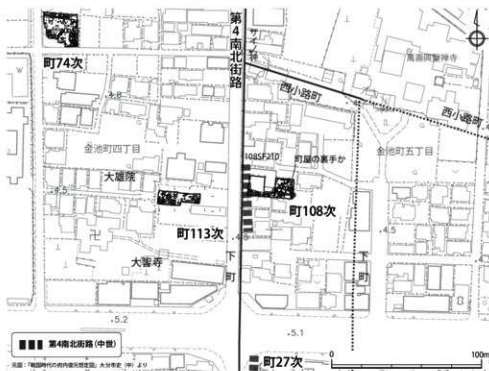
調査地点は、「府内古図」によると第4南北街路の東西両側に面する町「下町」に該当する。下町の中心を通る第4南北街路は、町113次より約100m南側で行った町27次地点において確認されており、15世紀末～16世紀初頭には敷設され、16世紀後半～末頃までは機能している^{〔136〕}。さらに、大きな特徴として、第4南北街路沿いの下町裏手（西側）には大雄院と大智寺が位置している。大雄院は16世紀初頭前後に建立、大智寺については15世紀後半に再興したとされ、島津氏の侵攻をまぬがれ現在まで場所を変えず存続している。史料から、両寺院は、第4南北街路の機能していた時期と概ね同じ時期に下町西側に位置していたことが推測される。

今回の調査地の東側にあたる町108次調査地点は、同じく下町の推定地であり、調査時に検出した第4南北街路（108SF210）から約30m東側に井戸跡や土坑など町屋の裏手に配される遺構^{〔137〕}が見つかった。これら周辺の調査結果から、中世（戦国時代末）の下町は、第4南北街路を挟んで両側町を形成していた可能性が高いと言えるが、今回の調査結果はこれを裏付けることはできなかった。また、今回近世の遺構として報告した調査区を南北に走る溝状遺構（SD030）は、町屋の背割溝であると同時に、西側に位置する大智寺との境界施設であった可能性も想定される。すなわち、今回の調査で検出した中世の遺構群は、「大智寺」に関連するものである可能性が示唆される。

2. 近世のまち「東新町」

東新町は、府内城・城下町の堀九升口から南下する日向道に面して東西両側に広がる町である。府内城下は、府内・松木・千手堂・笠和・同懸寺の5つの町組に分かれており、東新町は府内町（組）に属している。しかしながら、いわゆる「御門内」の町ではなく外町として形成された町である。1602～1605年に竹中重利が、府内城築城とともに大友時代の府内町を移転し新たに町割りを行った際に、東新町は戦国時代末期の姿を描く「府内古図」から読み取れる中世府内町からの移転した町ではなく、17世紀中頃に新たに形成された町である^{〔138〕}。しかし今回の調査地点やその周辺では、17世紀中頃の東新町形成時期を明確に示すものは確認できず、東新町形成後である18世紀～19世紀の町屋に関連する遺構や遺物のみが確認されている。

以上の点を踏まえて、今後周辺で調査を行う際の課題を抽出すると、①中世下町の町屋の展開範囲、②府内古図に記載された大智寺と大雄院に関連する明確な遺構の探索、③近世東新町の形成された時期である17世紀中頃の遺構や遺物の有無などの確認等が掲げられる。



第13図 町113次調査周辺の町割り (上：中世 下：近世) (1/2500)

【参考文献】

- 註1：大分市教育委員会 2007「大友府内11」（中世大友府内町跡第74次調査報告）
 註2：大分市教育委員会 2009「丹生川坂ノ市桑里跡 丹生遺跡群」経営体育成基盤整備事業（丹川地区）に伴う発掘調査報告書 2009
 註3：大分市教育委員会・中世都市研究会 2001「中世大友再発見フォーラム南宮都市・豊後府内 都市と交易」
 註4：大分市教育委員会 2014「大友府内21」 中世大友府内町跡第108次調査
 註5：大分市教育委員会 2008「大友府内12」 都市計画道路六坊新中島線改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)
 註6：註4と同じ
 註7：木村幾多郎 2001「豊後府内城下町移転と旧府内」大分・大友土器研究会論集 大分・大友土器研究会

第1表 遺構出土遺物一覧表①

遺構番号	遺構名称	土色	出土遺物	切り出し	備考	時期	グラフ
1	穴墓		陶器破片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)			近世	M-2-a20
2	土坑	暗灰色粘質土	瓦器・中瓦 赤・褐色土層・黄				M-2-a20
3	溝	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a19-a20
4	溝	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a19-a20
5	溝	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a18-a19-a19
6	溝	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a20-a21
7	柱穴	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a20
8	ピット	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a21
9	井戸跡	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a21
10	井戸跡	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a19-a20
11	土坑	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a22-a22
12	土坑	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a20-a20
13	井戸跡	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a22-a22
14	ピット	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a19
15	柱穴	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a19
16	溝(井戸跡) 溝(井戸跡)	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a21-a22-a22
17	土坑	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a22
18	井戸跡	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a21-a22-a22
19	土坑	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a22
20	柱穴	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a20
21	ピット	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a19-a20
22	ピット	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a21
23	土坑	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a21
24	土坑	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a20
25	溝	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a18-a18-a18
26	土坑	暗灰色粘質土	土器片・土器片 灰土層(厚さ約10cm)				M-2-a21

第2表 遺構出土遺物一覧表②

遺構番号	遺構名称	種別	土色	出土遺物	見つかり	備考	時期	グラフ
27	雑草層		土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			5029-031-032-034 様出	18世紀前半	M-2-e21-e22
28	土坑	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利				50242同一直線	17世紀前半	M-2-e20
29	5E029 井戸跡	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			31-29		18世紀前半	M-2-e22-e23
30	5D030 溝跡	(1)暗褐色粘質土 (2)暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			100-30		18世紀～19世紀	M-2-e15-e16
31	土坑	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			31-29		中世	M-2-e22
32	土坑	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			32-18		18世紀代	M-2-e21
33	ピット	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			19-33.30-100		18世紀前半	M-2-e19
34	土坑	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			34-18		中世	M-2-e21-e22
35	5A035 土坑	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			5040同一直線		18世紀前半	M-2-e17-e17
36	ピット	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利					18世紀後半～18世紀 後半	M-2-e16
37	土坑	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利						M-2-e15
38	土坑	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利					18世紀中頃以降	M-2-e15-e16
39	土坑	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利					18世紀後半～18世紀 後半	M-2-e16
40	土坑	(1)暗褐色粘質土 (2)暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			51-40.68-40		17世紀後半～18世紀	M-2-e13-e16-e15- e16
41	土坑	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利					中世	M-2-e16
42	土坑	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			40-42		18世紀後半～18世紀 後半	M-2-e16
43	土坑	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			43-25		中世	M-2-e16
44	カラン	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			52-44.110-44 56-44		近代	M-2-e16-e17-e17
45	土坑	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			45-48.50-48		18世紀後半	M-2-e16
46	土坑	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			5035同一直線 (一定下7間)		18世紀前半	M-2-e17-e17
47	カラン	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利					近代	M-2-e16-e17
48	雑草層	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			5040-051 様出		18世紀代	M-2-e15-e16-e15- e16
49	土坑	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			57-49.49-42		18世紀後半	M-2-e16
50	ピット	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			50-45		18世紀後半	M-2-e16
51	土坑	暗褐色粘質土 土層質土層 灰・黄 黄褐色土層 灰・付着型塊・内野山麓土・灰付片 自然遺物 五砂利			51-25.51-40		18世紀後半	M-2-e16

第3表 遺構出土遺物一覧表③

遺構番号	遺構名称	種別	土色	出土遺物	図面番号	備考	時期	グラフ
32		土境	暗褐色土	土師器・坪・皿・C 土師器土器・鉢・盃 中須段器 須賀系青磁片・白磁片 須賀系土器(灰泥器) 自然産物 玉砂利	52-64	5002同一遺構	遺構	M-2-616-617
33		土境	暗褐色土・ 暗灰色砂質土	土師器・皿・C 須賀系土器片 土師器土器・大甕・鉢・深鉢型火鉢 瓦質土器・大鉢・鉢 中須段器 須賀系青磁片 須賀系土器片(漆器) 自然産物 玉砂利			18世紀後半以降	M-2-617
34		ビツト	暗灰色粘質土	土師器土器 大甕片	54-63		遺構	M-2-616
35		ビツト	暗褐色粘質土	土師器・坪・皿・C・坪・ 須賀系土器(深鉢・漆器) 瓦器 中瓦			18世紀前半	M-2-618
36		土境	暗褐色粘質土・ 土・暗褐色砂質土	土師器・坪・A・坪・C・皿・C・小皿・C 須賀系土器片 中須段器 須賀系青磁片・白磁片 須賀系土器片 須賀系土器 深鉢(漆器)・甕・片(漆器)・黒釉陶器(漆器) 土製品 土鍋 瓦器 中瓦 自然産物 玉砂利	110-36.58-44	5002同一遺構	遺構	M-2-616-618-617- 617
37		土境	暗褐色粘質土	土師器・皿・C	37-52.57-49		18世紀後半以降	M-2-618-616
38		ビツト	暗褐色粘質土	須賀系土器(甕・漆器)	58-112		中層	M-2-618
39		ビツト	暗褐色粘質土	土師器・皿・C			18世紀後半	M-2-618
40		ビツト	暗褐色粘質土	土師器・皿・C 石製品 硝子 自然産物 玉砂利			18世紀後半	M-2-618
41		ビツト	暗褐色粘質土					M-2-618
42		ビツト	暗褐色粘質土					M-2-618
43		土境	暗褐色粘質土・ 暗褐色砂質土	土師器 漆器片(灰泥) 土師器土器片 瓦器(灰泥器)			18世紀後半以降	M-2-618
44		ビツト	暗褐色粘質土	自然産物 玉砂利			中層	M-2-617
45		ビツト	暗褐色粘質土	土師器・坪・皿・C			18世紀後半	M-2-618
46		遺跡		須賀系土器片 土師器土器片 須賀系土器(甕・漆器)	66-25.66-65 66-100		中層	M-2-615-616
47		カワツ		土師器・皿・C 漆器(漆器) 漆器			遺代	M-2-618
48		土境	暗褐色粘質土	土師器・坪・皿・C・小皿・C 須賀系土器 漆器片(灰泥器)・土器 石製品 硝子 自然産物 玉砂利	45-66.90-68		18世紀	M-2-618
49		土境	暗褐色粘質土・ 土・暗褐色砂質土	土師器・坪・A・皿・C 須賀系土器片 須賀系土器 漆器片(灰泥器)・片(甕・漆器)・深鉢(漆器) 須賀系土器 下城式甕 自然産物 玉砂利	69-95		18世紀後半	M-2-618
70		ビツト	暗褐色粘質土・ 暗褐色砂質土	土師器・坪・A・皿・C 土師器土器片			18世紀後半	M-2-618
71		ビツト	暗褐色粘質土・ 暗褐色砂質土	土師器・坪・A・皿・C 自然産物 玉砂利			18世紀後半	M-2-618
80		ビツト	暗褐色粘質土	土師器・坪・ 自然産物 玉砂利			18世紀後半～18世紀 後半	M-2-618
85		SK08	土境	土師器・坪・A・坪・A・C・小皿・C・小皿・C・小皿・C 須賀系土器 漆器片(灰泥器)・火鉢 瓦質土器 鉢 中須段器 須賀系青磁片 須賀系土器 深鉢(漆器) 漆器片(灰泥器) 自然産物 玉砂利	カワツ下より出土		18世紀前半	M-2-617-618
90		土境	暗褐色粘質土	土師器・坪・A・皿・C 土師器土器片 土製品 土鍋	90-53.90-45 90-98		18世紀前半	M-2-617-618
95		ビツト	暗褐色粘質土		89-95			M-2-618
100		土境	暗褐色粘質土	土師器・皿・C	100-30.88-100		18世紀後半	M-2-615-615
105		ビツト	暗褐色粘質土			5037より出土		M-2-619
110		SK10	土境	土師器・小皿・C・皿・C 須賀系土器 漆器片(灰泥器)・火鉢 中須段器 須賀系青磁片・白磁片 須賀系土器 深鉢(漆器) 漆器片(灰泥器) 須賀系土器 漆器片(灰泥器) 土製品 土鍋 自然産物 玉砂利	110-44.10-52 110-96		18世紀後半～18世紀 後半	M-2-616-617-618- 617
111		土境						M-2-621
112		土境			25-112.58-112			M-2-616
遺跡				土師器・坪・A・坪・A・C・小皿・C・小皿・C・小皿・C 須賀系土器 漆器片(灰泥器)・火鉢 瓦質土器 鉢 中須段器 須賀系青磁片 須賀系土器 深鉢(漆器) 漆器片(灰泥器) 須賀系土器 深鉢(漆器) 漆器片(灰泥器) 瓦器 中瓦・中瓦 漆器片(灰泥器) 漆器片(灰泥器)				
遺跡				土師器・坪・A・C・ 土師器土器 漆器 土師器土器 漆器 土製品 土鍋 自然産物 玉砂利				

遺構出土遺物一覧表

第4表 出土遺物観察表①

図録番号	遺物番号	種別	形状	寸法(mm)				色調・顔面	出土	調査・産地		備考	分析機関	図録番号
				口径・ 最大径	高さ・ 最大径	底径・ 最大径	孔径・ 最大径			内面	外面			
第11図-1	S0005	金付品	メソ	—	12+0	8.6	—	透明色	漆喰	胎動	胎動・胎動	ナン・西海		R002
第11図-2	S0005	鍍金銅片青磁	碗	—	42	—	—	灰青色	漆喰	胎動	胎動	鎌倉市文		R003
第11図-3	S0005	陶器	小鉢	15.3	3.1	2.1	—	淡青黄色	漆喰	胎動	胎動・胎動	ナン・西海		R006
第11図-4	S0005	瓦器	平瓦	5.1+0	3.3+0	1.9+0	—	灰青色	白色粘土・白色粘土	ナデ	ナデ・工具ナデ	横玉 羽田あり		R001
第11図-5	S0005	土器	土鍋	2.7	1.0	0.9	2.1	淡青色	石炭・角閃石	—	ナデ			R004
第11図-6	S0005	土製品	メソ	2.0	2.2	0.4	1.8	淡黄白色	白色粘土	ナデ	ナデ			R005
第11図-7	S0010	土器	鉢	—	13	16.0	—	淡青色	角閃石・長石	胎動ナデナデ	胎動ナデ・胎動ナデ	円B		R001
第11図-8	S0010	土器	鉢	—	1.9+0	—	—	淡青色	角閃石	胎動ナデ	胎動ナデ・胎動ナデ	円B		R002
第11図-9	S0010	土器	鉢	—	1.4+0	—	—	淡黄白色	角閃石・石炭・長石	胎動ナデ	胎動ナデ・胎動ナデ	円B		R003
第11図-10	S0010	瓦器土器	碗	—	4.8+0	—	—	淡黄白色	長石	ICナデ	胎動ナデナデ	横B		R004
第11図-11	S0010	漆器陶器	—	4.0+0	—	—	—	緑黄色	石炭・白色粘土	胎動ナデ	胎動	横海		R005
第11図-12	S0014	漆器陶器	碗	—	2.0+0	—	—	淡黄白色	漆喰	胎動	胎動	肥前系		R004
第11図-13	S0018	漆器陶器	碗	—	3.4+0	—	—	白・緑黄褐色	漆喰	胎動	胎動	横津		R002
第11図-14	S0018	漆器陶器	碗	—	2.8+0	—	—	ダーク黄褐色	漆喰	胎動	胎動	横津系		R003
第11図-15	S0018	瓦器	平瓦	9.0	9.8	2.5	—	淡青色	白色粘土	工具ナデ	ナデ・工具ナデ			R001
第11図-16	S0020	陶器	碗	—	2.4+0	—	—	灰青色	漆喰	胎動	胎動	横人あり		R004
第11図-17	S0030	瓦器	平瓦	8.3	7.8	2.4	—	灰青色	白色粘土	ナデ	ナデ・工具ナデ			R003
第11図-18	S0020	瓦器	平瓦	7.0	7.8	2.4	—	緑黄色	白色粘土	ナデ・工具ナデ	ナデ・工具ナデ			R001
第11図-19	S0020	瓦器	平瓦	—	4.1+0	—	—	淡青色・淡灰白色	石炭・角閃石	ナデ・工具ナデ	工具ナデ			R002
第11図-20	S0024	瓦器土器	鉢	—	4.7+0	—	—	灰青色	石炭・黄褐色	胎動ナデ・ICナデ	胎動ナデ・ICナデ			R001
第11図-21	S0030	土器	鉢	—	1.9+0	6.6	—	IC・淡青色	赤色粘土	胎動ナデ	胎動ナデ・胎動ナデ	円A・C		R012
第11図-22	S0030	土器	横小皿	4.8	1.1	3.2	—	褐色	赤色粘土・白色粘土	胎動ナデ	胎動ナデ	横小皿B		R001
第11図-23	S0020	土器	横小皿	3.0	1.1	3.1	—	褐色	赤色粘土・白色粘土	胎動ナデ	胎動ナデ・胎動ナデ	横小皿B		R002
第11図-24	S0025	土器	小皿	3.6	1.8	5.0	—	褐色	角閃石・赤色粘土・ 白色粘土	胎動ナデ	胎動ナデ・胎動ナデ	小皿B		R003
第11図-25	S0030	土器	小皿	10.0	2.0	4.8	—	IC・淡青色	砂粒1mm以下・ 赤色粘土・白色粘土	胎動ナデ	胎動ナデ・胎動ナデ	小皿B		R004
第11図-26	S0030	土器	小皿	9.0	1.8	5.2	—	褐色・IC・淡黄 褐色	白色粘土・赤色粘土	胎動ナデ	胎動ナデ・胎動ナデ	小皿B		R005
第11図-27	S0030	土器	鉢	10.2	2.2	16.0	—	IC・淡黄褐色	砂粒1mm以下・ 角閃石・赤色・赤 色粘土・赤色	胎動ナデ	胎動ナデ・胎動ナデ	円B		R012
第11図-28	S0030	土器	鉢	12.8	3.0	6.3	—	褐色	長石・赤色粘土	胎動ナデ・胎動ナデ	胎動ナデ・胎動ナデ	円B		R006
第11図-29	S0030	土器	鉢	11.8	3.3	6.0	—	IC・淡青色	砂粒1mm以下・ 角閃石・赤色・赤 色粘土・赤色	胎動ナデ	胎動ナデ・胎動ナデ	円B		R006
第11図-30	S0030	土器	鉢	—	1.8+0	5.4	—	灰黄色	石炭・長石	胎動ナデ	胎動ナデ・胎動ナデ	円B		R007
第11図-31	S0030	土器	小皿	—	2.2+0	—	—	IC・淡青色	長石・白色粘土	胎動ナデ	胎動ナデ	小皿C		R010
第11図-32	S0030	土器	小皿	—	1.7+0	—	—	黄褐色・灰黄 色	赤色粘土	胎動ナデ	胎動ナデ	横人込み		R011
第11図-33	S0030	鍍金銅片青磁	碗	—	2.8+0	—	—	灰黄色	漆喰	胎動	胎動	横津系		R014
第11図-34	S0025	鍍金銅片青磁	碗	—	1.9+0	—	—	黄褐色	漆喰	胎動	胎動			R015
第11図-35	S0040	土器	鉢	—	1.2+0	16.4	—	IC・淡青色	角閃石・赤色粘土・ 白色粘土	胎動ナデ	胎動ナデ・胎動ナデ	円A		R003
第11図-36	S0040	土器	鉢	—	2.5+0	—	—	明黄褐色	長石・赤色粘土	胎動ナデ	胎動ナデ	円B		R004
第11図-37	S0040	土器	皿	10.0	2.4	—	—	黄褐色	砂粒1mm以下・ 角閃石・赤色粘土	胎動ナデ	胎動ナデ・胎動ナデ	皿C		R001
第11図-38	S0040	土器	皿	—	2.1+0	—	—	IC・淡黄褐色	角閃石	胎動ナデ	胎動ナデ	皿C		R005
第11図-39	S0040	土器	皿	16.0	2.1	—	—	IC・淡黄褐色	角閃石・長石	胎動ナデ・胎動ナデ	胎動ナデ・胎動ナデ	皿C		R002
第11図-40	S0046	土器	鉢	11.0	2.5+0	—	—	褐色	赤色粘土	胎動ナデ	胎動ナデ	円B		R001
第11図-41	S0046	土器	鉢	13.2	1.3	—	—	IC・淡黄褐色	赤色粘土	胎動ナデ	胎動ナデ	皿C		R002
第11図-42	S0046	土器	皿	12.4	1.8+0	—	—	IC・淡黄褐色	長石	胎動ナデ	胎動ナデ・胎動ナデ	横津系		R003
第11図-43	S0046	石製品	磁石	4.8	3.5	0.6	—	—	—	—	—			R004
第11図-44	S0053	瓦器土器	瓦鉢	—	4.7+0	—	—	灰青色	長石・石炭・白色粘土	横方向のICナデ	ナデ・横方向のICナデ			R001
第11図-45	S0053	瓦器土器	瓦鉢	—	3.0+0	—	—	灰青色	石炭・長石	胎動ナデ	ICナデ	横のICナデ		R002
第11図-46	S0053	鍍金銅片青磁	碗	—	3.1+0	16.2	—	緑灰色	漆喰	胎動	胎動			R004
第11図-47	S0056	白磁	皿	—	2.4+0	—	—	灰白色	漆喰	胎動	胎動			R004
第11図-48	S0056	白磁	碗	—	3.4+0	—	—	灰白色	漆喰	胎動	胎動・胎動			R007

第5表 出土遺物観察表②

調査番号	遺物番号	種別	形状	法量(mm)				色相・釉面	出土	調査・保存		備考	分館時期	J番号
				口径・最大長	底径・最大長	底径・最大長	口径・最大長			内面	外面			
第1図-49	SK026	青磁	碗	—	13+0	—	—	淡緑灰色	埋藏	施釉	施釉			H006
第1図-50	SK036	土器品	土瓶	4.9	1.3	1.2	7.0	褐色	石灰・白色粒子	—	ナリ・釉ナシ			H003
第1図-51	SK068	石製品	2.5口	—	(34.0)	8.0	6.7	—	—	—	—	蔵民前		H001
第1図-52	SK005	土器品	小皿	7.7	2.1	5.0	—	淡褐色～暗茶色	石灰・内陶石・黄褐色 白色粒子	施釉ナリ	石灰・内陶石・黄褐色 白色粒子	小皿底		H001
第1図-53	SK005	土器品	小皿	7.1	1.6	5.0	—	褐色色	石灰・内陶石・黄褐色 白色粒子	施釉ナリ	施釉ナリ・未切刷し	小皿底		H002
第1図-54	SK005	土器品	鉢	11.8	3.0	6.0	—	褐色	石灰・内陶石・黄褐色	施釉ナリ	施釉ナリ・未切刷し	鉢底		H003
第1図-55	SK005	土器品	鉢	11.4	3.0	5.4	—	褐色色	石灰・内陶石・黄褐色	施釉ナリ	施釉ナリ・未切刷し	鉢底		H004
第1図-56	SK026	土器品	鉢	(12.7)	2.8	5.8	—	淡褐色	石灰・黄褐色	施釉ナリ	施釉ナリ・未切刷し	鉢底		H005
第1図-57	SK005	土器品	鉢	(11.4)	1.5	—	—	淡褐色	石灰・内陶石・黄褐色 白色粒子	施釉ナリ	施釉ナリ	鉢底		H007
第1図-58	SK005	瓦葺土器	罐鉢	—	34+0	—	—	灰色	石灰・黄褐色	施釉ナリ	施釉ナリ・ナリ目	AI		H008
第1図-59	SK005	白磁	碗	—	24+0	—	—	灰白色	埋藏	施釉	施釉	横江野		H011
第1図-60	SK005	白磁	碗	—	20+0	—	—	淡緑灰色	埋藏	施釉	施釉・洗滌			H012
第1図-61	SK005	褐色陶器	罐鉢	(20.0)	5.8+0	—	—	暗赤褐色	褐色色粒子	施釉ナリ・自然釉・黄7日	施釉ナリ・自然釉	横瀬 中世Y層		H006
第1図-62	SK005	褐色陶器	罐鉢	—	31+0	—	—	暗赤褐色	石灰・内陶石・白色 粒子	施釉ナリ・黄7日	施釉ナリ・黄7日	横瀬		H009
第1図-63	SK005	褐色陶器	大甕	—	33+0	—	—	暗赤褐色	白色粒子・赤色粒子	自然釉	施釉ナリ・付着物(泥土目)	横瀬		H010
第1図-64	SK005	土器品	鉢	11.8	2.2	7.0	—	淡褐色	石灰・黄褐色・赤色 白色粒子	施釉ナリ	施釉ナリ・未切刷し	鉢底		H003
第1図-65	SK005	土器品	鉢	—	3.0	(6.0)	—	淡白灰色	石灰・黄褐色	施釉ナリ	施釉ナリ・未切刷し	白色基部		H006
第1図-66	SK005	土器品	小皿	8.8	1.9	4.9	—	暗茶色	石灰・黄褐色・赤色 白色粒子	施釉ナリ	施釉ナリ・未切刷し	小皿底		H001
第1図-67	SK005	土器品	鉢	—	23+0	—	—	淡黄白色	石灰・黄褐色	ナリ・施ナリ	施ナリ	皿底		H005
第1図-68	SK005	土器品	皿	10.2	2.1	4.0	—	淡黄白色	石灰・内陶石・黄褐色	ナリ・施ナリ	施ナリ	皿底		H004
第1図-69	SK005	土器品	皿	(11.2)	2.3	—	—	淡白灰色	石灰・黄褐色	ナリ・施ナリ	施ナリ	皿底		H009
第1図-70	SK005	土器品	皿	(12.2)	2.3	—	—	淡白灰色	石灰・黄褐色	ナリ・施ナリ	施ナリ	皿底		H010
第1図-71	SK005	土器品	皿	(11.0)	2.0	(5.2)	—	淡黄白色	石灰・黄褐色	ナリ・施ナリ	施ナリ	皿底		H008
第1図-72	SK005	土器品	皿	(12.4)	2.0	(5.7)	—	淡白灰色	石灰・黄褐色	ナリ・施ナリ	施ナリ	皿底		H012
第1図-73	SK005	土器品	皿	(13.0)	2.0	(6.6)	—	淡褐色～白灰色	石灰・黄褐色	ナリ・施ナリ	施ナリ	皿底		H002
第1図-74	SK005	土器品	皿	(12.2)	2.2	(6.5)	—	白灰色	石灰・黄褐色	ナリ・施ナリ	施ナリ	皿底		H007
第1図-75	SK005	土器品	皿	(13.4)	1.9	(7.0)	—	淡白灰色	石灰・内陶石・黄褐色	ナリ・施ナリ	施ナリ	皿底		H011
第1図-76	SK005	土器品	土瓶	4.9	1.0	1.2	4.7	淡褐色	石灰・白色粒子	ナリ	ナリ・釉ナシ			H013
第1図-77	SK100	土器品	皿	(13.0)	2.5	(6.3)	—	淡白灰色	石灰・黄褐色	ナリ・施ナリ	施ナリ	皿底		H002
第1図-78	SK100	土器品	皿	(13.2)	2.3	(6.2)	—	淡白灰色	石灰・内陶石・黄褐色	ナリ・施ナリ	施ナリ	皿底		H001
第1図-79	SK110	土器品	小皿	(5.3)	1.4	(3.2)	—	暗茶色	石灰・黄褐色・赤色 白色粒子	施釉ナリ	施釉ナリ・未切刷し	小皿底		H002
第1図-80	SK110	土器品	鉢	(12.2)	3.3	(6.2)	—	白灰色	石灰・黄褐色・赤色 白色粒子	施釉ナリ	施釉ナリ・未切刷し	鉢底		H001
第1図-81	SK110	土器品	鉢	—	21+0	—	—	淡白灰色	石灰・黄褐色・赤色 白色粒子	施釉ナリ	施釉ナリ・未切刷し	鉢底		H003
第1図-82	SK110	土器品	皿	12.0	2.7	(5.4)	—	淡黄白色	石灰・黄褐色	施釉ナリ	施釉ナリ・未切刷し	皿底		H004
第1図-83	SK110	土器品	皿	(13.0)	2.0	(6.7)	—	暗茶色	石灰・内陶石・黄褐色	施釉ナリ	施釉ナリ・未切刷し	皿底		H005
第1図-84	SK110	褐色瓦土器	片口鉢	—	23+0	—	—	褐色	石灰・白色粒子	施釉ナリ	施釉ナリ	片口鉢		H006
第1図-85	SK110	瓦葺	横瀬	172+0	5.5+0	3.0	—	灰色	長石・白色粒子	工具ナリ	工具ナリ			H007
第1図-86	SK025	褐色陶器	罐鉢	—	123+0	13.0	—	暗褐色	埋藏	施釉ナリ・黄7日・黄7日	施釉ナリ	横瀬		H001
第1図-87	SK030	土器品	鉢	(12.8)	3.6	(6.2)	—	暗茶色	石灰・黄褐色・赤色 白色粒子	ナリ・施ナリ	施ナリ	皿底		H001
第1図-88	SK030	褐色陶器	碗	—	21+0	3.0	横瀬	淡黄白色	埋藏	施釉	施釉・洗滌	吉澤 二次焼酎(内面)		H002
第1図-89	SK030	褐色陶器	土瓶	—	—	—	—	内・暗褐色・外 淡黄白色	砂粒少ない黄褐色 白色粒子	施釉	施釉	皿底		H003
第1図-90	SK030	土器品	鉢	(11.2)	4.5	(6.0)	—	褐色	石灰・黄褐色・赤色 白色粒子	ナリ・施ナリ	施ナリ	皿底		H001
第1図-91	SK029	磁器	皿	—	23+0	—	—	緑・黄・赤・黒 淡黄白色	埋藏	施釉・黄7日・白磁ナリ	施釉・洗滌	黄7日		H004
第1図-92	SK029	磁器	皿	(8.8)	5.5	3.7	—	透明緑	埋藏	施釉	施釉・洗滌	黄7日		H003
第1図-93	SK029	褐色陶器	皿	(20.0)	5.5+0	—	—	粘土・暗茶褐色・ 黄・白・褐色	埋藏	施釉	施釉	横江野		H002
第1図-94	SK029	土器品	鉢	—	10+0	(1.6)	—	暗茶色	石灰・内陶石・黄褐色 白色粒子	施釉ナリ	施釉ナリ・未切刷し	鉢底		H001
第1図-95	SK029	土器品	鉢	—	23+0	—	—	暗茶色	石灰・内陶石・黄褐色 白色粒子	ナリ・施ナリ	施ナリ	皿底		H002
第1図-96	SK029	褐色陶器	皿	—	153+0	—	—	暗茶色	石灰・白色粒子	施釉ナリ	施釉	横瀬		H003
第1図-97	SP015	褐色陶器	片口	—	15+0	—	—	白灰色	埋藏	施釉(一部剥離あり)	施釉(一部剥離あり)	横瀬		H001
第1図-98	SP015	褐色陶器	碗	—	15+0	—	—	灰色	埋藏	施釉	施釉	横瀬		H003
第1図-99	SK044	瓦葺土器	大甕	(20.4)	2.8	(6.0)	—	黄灰色	黄石	32ナリ	32ナリナリ			H007

第6表 出土遺物観察表③

調査番号	遺物番号	種別	形状	寸法(mm)				色相・釉薬	胎土	図章・装飾		備考	分類時期	附番号
				口径/ 最大径	器高/ 最大径	底径/ 最大径	口径/ 器高			内面	外面			
第12図-30	S4044	瓦質土器	鉢	(18.6)	5.7	—	—	黒褐色	長石	点状ナシ	点状状ナシ			PC06
第12図-30	S4044	磁灰質灰青磁	香炉	—	3.7+0	—	—	黄褐色	緑釉	点釉	点釉			PC05
第12図-40	S4044	灰青磁器	杯皿	(8.6)	5.1	3.2	—	透明釉	緑釉	点釉	点釉・点状	「大塚新井の香炉」 参照		PC04
第12図-41	S4044	灰青磁器	碗	—	4.2+0	4.8	—	透明釉	緑釉	点釉	点釉・点状	参照		PC03
第12図-42	S4044	灰青磁器	袋付	(9.6)	2.3	(6.5)	—	1袋付(黄白色に 点付)	緑釉	点釉・袋付	点釉	肥前県 佐多郡平島 高台内出土品で全形不詳		PC02
第12図-43	S4044	灰青陶器	罐鉢	(31.2)	12.2	(14.0)	—	緑赤褐色	白化粧下	点状ナシ・点状ナシ+横7字	点状ナシ・切7字・横無線型	鎌倉 近世1期		PC01



調査区東側（西より）



調査区西側（東より）

写真図版 2



SK005 検出状況 (東より)



SK035 土層断面 (東より)



SK035 完掘状況 (東より)



SK085 土層断面 (南より)



SK085 完掘状況 (南より)



SK110 完掘状況 (北より)



SE030 完掘状況 (北より)



SE029 井筒検出状況 (西より)



第11図-1



第11図-4



第11図-6



第11図-34



第11図-45



第11図-51 上面



第11図-51 下面



第12図-22



第12図-23



第12図-27



第12図-30



第12図-42 内面



第12図-22 ~ 25・28・29



第12図-42 外面



第12図-43

報 告 書 抄 錄

ふりがな	おおきとふのうーちういおおきとふのうーちうい						
書名	大友府内町24 中世大友府内町跡第113次調査						
副書名	集合住宅建設に伴う発掘調査報告書						
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第143編						
編著者名	池田千太郎・野村夏 株式会社九州文化財総合研究所(業務責任者 井上崇博)						
編集機関	大分市教育委員会						
所在地	〒870-8504 大分市豊郷町2番31号 TEL.097534-6111(代表) FAX.097536-0435						
発行年月日	西暦2016年3月18日						
ふりがな 所収題名	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘理由	
おおきとふのうーちうい 中世大友府内町跡第113次	市町村 遺跡番号						
	14201	201051	33° 43' 56"	131° 36' 53"	20130805～20130918	234.24㎡	
所収題名	種別	年代	主な遺構	主な遺物			
中世大友府内町跡第113次	都市	中世・近世	商業土坑・溝状遺構・井戸跡	土師器・中国陶磁器・国産陶磁器			
調査地点は、中世大友府内町跡の北西端に位置している。中世府内のまの様子を描いた「府内古図」では「下町」に、近世の府内城下町においては「東町市」にあたり、中世と近世の道路が重なっている部分である。中世の「下町(西側)」は、「大智寺」と大塚山の記載が見られる。「下町(東側)」は中世の町域に属しない。現在(東町市)は長良(塩九手)通が通り、中世では東町市北道路、近世では日東道路(国道1号)に相当し、中世から現在に至るまでの市街地の主要な幹線道路としてよく知られていることが分る。周辺では、長良(塩九手)通を挟んで東側に2016年の調査で府内町跡第108次調査が実施されており、近世及び中世の道路遺構や、井戸跡などの町屋集落の状況が確認されている。 調査の結果、近世においては、18世紀から19世紀の井戸やまの西側の区画遺構と想定される溝状遺構が検出された。近世の「東町市」は18世紀中頃に形成されたといわれる。これらの遺構は「東町市」が形成された後の生活空間の様子を示している。 中世においては、16世紀前半から後半の土師器や生土器器が出土・検出された。これらの土師器は、第4南北道路を基準とした奥行き830mの町屋集落の範囲より54mに西側に集中しており、周辺の調査で確認した町屋の空間利用とは異なることが考えられ、「下町」の一部ではなく、「大智寺」や「大塚山」の隣接性が見られる。							
要約							

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第143集

大友府内24

中世大友府内町跡第113次調査

— 黒谷住宅跡跡地に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2016年3月18日

発行 大分市教育委員会
大分市黄揚町2-31